

令和 4 年 6 月 3 日現在

機関番号：15301

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K13250

研究課題名(和文) ベトナム人日本語学習者における日本語漢字単語の学習と処理

研究課題名(英文) Learning and Processing of Japanese Kanji Words by Vietnamese Learners of Japanese

研究代表者

長野 真澄 (Nagano, Masumi)

岡山大学・全学教育・学生支援機構・准教授

研究者番号：40633699

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究ではベトナム人上級日本語学習者を対象として、母語の漢越音の知識が日本語学習にどのように利用され、日本語漢字単語の処理過程にどのように影響するか、について、インタビュー及び心理学実験によって検討した。検討の結果、ベトナム人上級日本語学習者は、自身の適正や状況に応じて日本語学習における漢越音知識の利用の有無や利用方法を戦略的に選択していることが示唆された。また、日本語漢字と漢越音の対応に関する知識を十分に持つ学習者においては、漢越音との音韻類似性が高い場合に日本語漢字単語の意味処理が促進されることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでにベトナム日本語学習者の母語の漢越音知識に着目した研究はいくつかあったものの、実証的に検討したものは多くなかった。近年、ベトナム人日本語学習者が急増し、その特徴に注目が集まる中、本研究は、インタビューや筆記テスト、心理学実験を組み合わせ母語の漢越音知識が漢字や漢字単語の学習及び処理に与える影響やその個人差を実証的に明らかにした点で意義があるといえる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to investigate the influence of Sino-Vietnamese sounds on learning and recognition of Japanese Kanji words for Vietnamese learners of advanced Japanese through the interviews and the psychological experiments. The results showed that (1) although there were big individual differences, each learner strategically chose how to use the knowledge of Sino-Vietnamese sounds, and (2) Vietnamese learners' knowledge of Sino-Vietnamese sounds affects the processing of Japanese Kanji words.

研究分野：日本語教育

キーワード：ベトナム人日本語学習者 漢越音 語彙判断課題 心内辞書 インタビュー

1. 研究開始当初の背景

現在のベトナムでは一般的に漢字表記は用いられず、日本語教育の現場でベトナム人日本語学習者はいわゆる非漢字圏学習者と見なされることが多い。その一方で、ベトナム語には漢語由来の語彙が数多くあり、それらの語彙は個々の漢字に対応するベトナム語音、すなわち、漢越音によって構成されることから、ベトナム人日本語学習者は、漢字や漢字単語の学習及び処理において他の非漢字圏学習者と異なる特徴を持つと考えられる。母語で漢字表記を使用する中国人日本語学習者や、母語で漢語由来の語彙を使用する韓国人日本語学習者については、漢字や漢字単語の学習及び処理について検討が重ねられているが、これまで、ベトナム人日本語学習者を対象とした検討は多くなく、母語の漢越音知識がどういった影響を及ぼすかは明らかでない。本研究の以下の目的が達成されれば、2010年代以降、日本国内で急増したベトナム人日本語学習者について有益な情報を提供できると考えられた。

2. 研究の目的

本研究は以下の2点を目的とした。

(1) ベトナム人上級日本語学習者が日本語学習において、どのようにして日本語漢字と母語の漢越音との対応に気づき、上級に至るまでにどのように漢越音知識を利用してきたかを明らかにする。

(2) ベトナム人上級日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程を検討した上で、長野(2017)で示されたベトナム人中級日本語学習者と比較することにより、日本語の習熟度向上に伴う心内辞書の変容を検討する。

3. 研究の方法

(1) 日本語学習においてどのように漢越音知識を利用してきたかについて、日本国内の大学で学ぶベトナム人上級日本語学習者5名を対象として個別に半構造化インタビューを行い、SCAT (Steps for Coding and Theorization; 大谷, 2019)による分析を行った。5名はいずれもベトナムで数か月間日本語を学習した後に来日し、同一の大学で日本語学習を続けて日本語能力試験N1に合格しており、総学習歴は4年強であった。また、各調査協力者が漢字と漢越音の対応に関する知識をどの程度有しており、その知識量に単語属性による差があるかどうかを確認するために、漢字単語に対応する漢越音を記入する筆記解答式のテストを行った。

(2) ベトナム人上級日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程を検討するために、視覚呈示の語彙判断課題を用いて実験を行った。その際、実験参加者の漢字と漢越音の対応に関する知識量を把握するために、漢字単語に対応する漢越音の記入を求める筆記解答式のテストを行い、十分な知識量があることが確認された11名の結果を分析対象とした。語彙判断課題では、越日2言語間での使用漢字の異同と音韻類似性の高低を操作した4種類の単語材料を用いて平均正反応時間を測度とし、2×2の2要因分散分析を行った。

4. 研究成果

(1) ベトナム人上級日本語学習者を対象とした日本語学習における漢越音知識の利用についてのインタビューの結果、類似した日本語学習歴を持つ者でも、漢越音知識の利用状況は個人差が極めて大きいことが明らかとなった。すなわち、ベトナム人日本語学習者においては、母語で漢字表記を用いる中国人日本語学習者とは異なり、学習者自身が漢字と漢越音の対応を意識的に記憶しなければ、母語の漢越音知識を日本語学習に利用できず、対応を記憶するかどうかは学習者自身の判断と努力によるということである。具体的には、調査協力者5名のうち2名は、漢字を学習する際に対応する漢越音を必ず確認し、対応を無理なく覚えられる場合のみ漢字と関連付けて記憶するようにしていた。その他、初級時点で漢字と漢越音の対応を記憶することを一旦中止したものの、上級を目指す段階で読解力向上という明確な目的のもとで対応を記憶する努力を再開した者や、上級を目指す段階で学習方法や使用教材が変化したことに伴い、漢越音に注意を向けなくなった者、あるいは、自身の学習方法や学習観にそぐわないという理由で、初級から上級に至るまで漢越音に注意を払ったことがない者がおり、個人差の大きさが示された。

(2) 日本語学習に漢越音知識を利用したことがあるものに共通していたのは、必ずしも全ての漢字の漢越音を覚えることに固執しない姿勢である。その姿勢は、漢字単語に対応する漢越音を記入する筆記解答式のテストの結果に表れており、越日2言語間で元の使用漢字が同じものは正答率が100%に近いが、使用漢字が異なるものは正答率がやや下がり、かつ個人差が大きかった。また、漢字と漢越音の対応をある程度のレベルまで学び続けることによって、初見の漢字単語であっても漢越音をある程度推測できるようになり、漢越音を通じた意味推測が可能になる

という意見も共通して聞かれた。さらに、母語の語彙量に個人差があるように、ベトナム語の漢越音の知識量自体にも個人差があり、母語において豊富な漢越音知識を自負する者は日本語学習においても漢越音知識を積極的に利用しようとする傾向があることが示唆された。

(3) ベトナム人上級日本語学習者 16 名を対象とし、漢字単語に対応する漢越音の記入を求める筆記解答式のテストを行った結果、正答率 8 割以上の上位群 11 名と正答率 5 割以下の 5 名に分けられた。その中間層は存在しなかった。上位群と下位群の間で日本語学習歴や滞日歴に特徴的な違いはなく、漢字と漢越音の対応に関する知識量の差はそうした違いによるものではなく、より個別的な背景によるものであることがうかがえた。上位群の単語属性別の平均得点について 2×2 (使用漢字の異同 \times 音韻類似性の高低) の 2 要因分散分析を行ったところ、音韻類似性の主効果と 2 つの要因の交互作用が有意であった。すなわち、音韻類似性にかかわらず異形語 (使用漢字が異なる単語) よりも同形語 (使用漢字が同じ単語) の正答率が高く、異形語については音韻類似性が低い単語よりも音韻類似性が高い単語の正答率が高いことが示された。また、同形語の平均得点は満点に近かった。これらのことから、上位群は漢越音が漢字単語を記憶する手がかりになり得る場合、対応する漢越音を意識的に記憶し、利用していることが考えられる。一方、下位群については、記述統計の範囲ではあるが、単語属性によって平均得点に著しい差がみられ、同形かつ音韻類似性の高い単語の正答率は 8 割程度、同形で音韻類似性が低い単語の正答率は半分程度であり、異形語の正答率は 1 割以下であった。これらのことから、下位群は意識的に漢字と漢越音の対応を学んでいるわけではなく、偶発的に知ったもののうち、覚えやすいもののみ記憶に留まっている状況だと推察できる。

以上のことから、ベトナム人上級日本語学習者は、漢字単語の記憶の手がかりになり得る漢越音について意識的に対応を記憶し、日本語学習に利用している者と、そうでない者に明確に分かれることが示されたといえる。

(4) 漢字単語に対応する漢越音の記入を求める筆記解答式のテストで正答率が 8 割以上であり、漢字と漢越音の対応に関する知識が十分にあることが確認された 11 名の語彙判断課題の Yes 試行の平均正反応時間について、 2×2 の 2 要因分散分析を行った。その結果、音韻類似性の主効果が有意であり、使用漢字の異同にかかわらず、音韻類似性の高い単語が音韻類似性の低い単語よりも反応時間が短いことが示された。また、使用漢字の異同の主効果と 2 つの要因の交互作用は有意ではなかった。これらのことから、漢字単語が視覚呈示されると、日本語の形態表象の活性化から日本語の音韻表象の活性化を経て意味処理され、また、音韻類似性が高い単語を処理する際に、ベトナム語の音韻表象の活性化が漢字単語の意味処理を促進することが示唆されたといえる。

(5) 上記の結果と長野 (2017) で示されたベトナム人中級日本語学習者を対象とした実験の結果を比較したところ、中級と上級のベトナム人日本語学習者の間には、日本語の習熟度による漢字単語の処理過程の変容はみられないことが明らかになった。これは、中国人日本語学習者や韓国人日本語学習者を対象とした研究結果との違いである。この違いの背景には、両者の日本語漢字単語の処理過程における母語への元々の依存度が関係していると考えられる。すなわち、習熟度が比較的低い中国人日本語学習者や韓国人日本語学習者は、ある属性の漢字単語を処理する際に母語の知識に大きく依って処理し、習熟度が上がるにつれてその依存度が下がっていくのに対し、ベトナム人日本語学習者は習熟度にかかわらず日本語漢字単語の処理において母語の漢越音知識への依存度はそれほど大きくなく、単語属性によってその漢字単語の処理を促進する支えになる程度だと推察される。

<引用文献>

大谷 尚 (2019). 『質的研究の考え方 研究方法論から SCAT による分析まで』名古屋大学出版会.

長野 真澄 (2017). 「ベトナム人日本語学習者における日本語漢字単語の視覚的認知一越日 2 言語間の使用漢字の異同と音韻類似性を操作した実験的検討一」『留学生教育』22, 9-18.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 長野 真澄
2. 発表標題 ベトナム人上級日本語学習者の漢字単語学習における漢越音知識の利用状況 インタビュー調査による探索的検討
3. 学会等名 第26回留学生教育学会・年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 長野 真澄
2. 発表標題 ベトナム人上級日本語学習者における漢越音の知識と日本語漢字単語の処理過程
3. 学会等名 2021年度日本語教育学会秋季大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------